

BCS

BUILDING CONTRACTORS SOCIETY
PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

II

第三回受賞作品（一九八二年）

伊藤忠商事東京本社ビル 後編

「商社冬の時代」を乗り越えて今に続く伊藤忠商事。受け継がれる経営思想と先駆的な機能を併せ持つ東京本社ビル。包み込む自然石の外観は陽の光を浴び、混沌とした現代を照らす。

光庭を見上げる。巨大な吹抜空間は視覚的な連続性を持たせ、自然の光を最大限に採り入れている。まさに「光庭」という名がふさわしいものになっている。（写真：村井 修）

創意工夫で乗り切った 三つの課題

工事は、一九七八年に準備に入り、すぐに本工事に着手することとなった。施工を前に解決すべき課題が三つあった。一つ目の課題は、風対策である。伊藤忠商事本社ビルが建つ青山の土地は、海拔の低い渋谷や赤坂に囲まれ、海拔四〇メートルほどと比較的高い地域となっている。そのため、風が強い。霞が関ビルやサンシャイン60など

高層ビル建築が進み、ビル風の影響が社会問題となっていた当時、風の影響を考えないわけにはいかなかった。そこで、「建物が建つ前に風速計を近隣のあちこちに置いて何度も風の影響を調べてまわりました」――施工者である間組の工事課長・鈴木捷夫氏（当時）は語る。また、その後も日建設計とともに風洞実験を行い、雁行配置の平面形的设计に至るまでのデータ収集に努めた。

二つ目の課題は工事中の近隣の配慮であった。もともと商業地域であるうえ住民も多いこの土地を考慮し、特に基礎工事のときに掘削した一五立方メートルにも及ぶ土を搬出するダンプの出入りには細心の注意が払われた。交通量の多さでは有名な青山通りを昼夜問わずダンプが出入りすることになるからだ。車両運行管理と同時に工程管理にも苦心した。現場内は資材置き場が限られているうえ、外壁の石材運搬などが大量であったため、施工が始まってから急遽変更を行うこととなった。当初大型タワークレーン二基で現場を切り盛りする予定だったが、資材移動と施工を同時に行うため、途中から中型タワークレーン四基に変更したのである。これにより作業が効率的に進み、待機車両などの諸問題も解決し、スピードアップが必要とされた後半の施工がスムーズに運んだ。

三つ目の課題は光庭の最下部であり、玄関ホールの上窓ともなるガラス屋根（一六メートル×一〇メートル）の施工である。この建物の特徴の一つともいえる重要な部分であった。

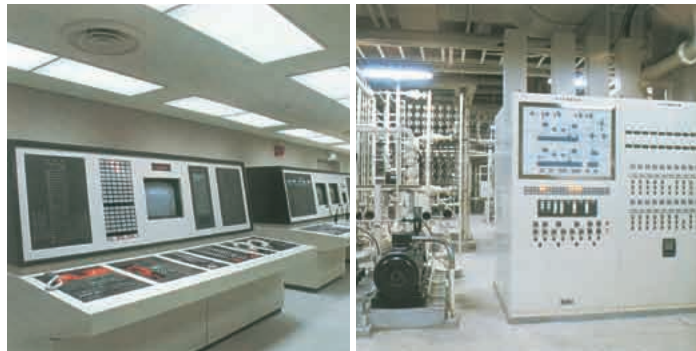


様々な条件のもと、周辺環境の対応や工事の効率を考えた工事。それにより安全性が高くなった。（提供：三輪晃久写真研究所）

ガラス屋根は万一の場合の落下物にも十分耐えられる強度を確保するため、鉄骨の骨組みと三枚貼り合わせの複層ガラスによって構成され、安全性が考慮されている。ガラスを四五度傾けた山形のフィレンゾフィルターラスの組み合わせは複雑である。それらを溶接するとなると歪みが生じてしまう。溶接長が六メートル棒換算で数万メートル、これだけの電気溶接技術を持った鉄骨業者は少ない。本体製作会社と検討の結果、大阪の会社に依頼した。結果見事な姿で出来上がった。さらに難航したのは設置である。ガラスだけでも一四メートルに及ぶガラス屋根を完全に組んだ状態のままタワークレーンで一気に吊り上げ、設置する工事である。なるべく人通りが少ない時間帯を選び、深夜に行われたこの工事は異様な緊張に包まれていたという。携わった人々は今でも口々にこの工事のなかで一番緊張した瞬間だったと声をそろえる。鈴木氏はこのガラス屋根が吊り上げられている間の息を呑む感覚と、ぴったり納まった瞬間の達成感が忘れられないとい

工事概要

所在地：東京都港区北青山2-5-1
建築主：青山地所株式会社
設計者：株式会社日建設計
施工者：株式会社間組
竣工：昭和55年10月
敷地面積：19,480㎡
建築面積：7,550㎡
延床面積：112,860㎡
階数：地下4階、地上22階、塔屋1階
構造：鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造



左/ 当時としては珍しかったコンピューターによる全館管理を行っていた、建物の計画時から環境に対する配慮がされていた事が伺える。右/ 現在でも数が少ないダブル配管による中水(再利用水)設備。当時としては先駆的な設備になっている。(写真:「伊藤忠商事株式会社 東京本社ビル」パンフレットより抜粋)

ために取り入れられた当時としては最新の建築技術は、いまでもメンテナンスが施され、トップ商社にふさわしい機能性と経済性の融合を果たしている。ビルの北側に配された窓の二重ガラスは室内の快適性、遮音性、断熱性を向上させて、オフィス環境向上に一役買っている。また、高層ビルは室内の空調を正常な状態に維持するため窓を密閉することが多いが、このビルでは開閉可能な小窓を足元に



無柱空間は横のつながりが重要な商社にとって、大きな意味を持つものになっている。また、足元は開閉可能で換気などに役立っている。(写真:「伊藤忠商事株式会社 東京本社ビル」パンフレットより抜粋)



光庭によって消費電力を抑え、最少人数の残業にも対応できる換気の効果も併せ持つ。(提供:三輪晃久写真研究所)

設けている。二十四時間体制でビジネスが展開されており、空調が使用できない最少人数の残業時間帯でも、自然換気が行えるという商社ならではの工夫である。さらに、ダブル配管による中水(再利用水)設備システムがいち早く取り入れられた。中水施設は排水を処理して循環利用するものであり、主な用途はトイレの洗浄水としての使用であった。東京都で義務化されたのはこれより後のことであり、先駆的な施設であったといえる。

このような設備は今後もメンテナンスを続け、できる限り使用し続けるという。また、二〇一〇年に屋上に設置した太陽光発電は約一〇〇キロワットの発電容量(東京本社ビルの三・五フロア分の照明電力に相当)があり、高層ビルの屋上では国内最大規模の太陽光発電システムとなっている。

冬の時代を乗り越え、ゆるぎない経営理念に基づいて築かれた伊藤忠商事東京本社ビル。竣工から三二年経ったいまなお、堂々たる商社の風格がこの建物からは放たれ続けている。

う。薄間に包まれた現場での緊張と歓喜が時代を超えて伝わってくる。

堂々たる商社の風格

石材調達遅れの影響で、竣工を延期するかどうかの検討も行われたが、一九八〇年十一月四日に竣工式を迎えることができた。設計開始から工事完成まで七年半という年月が流れていた。

エントランスは外壁と同じマガニー・レッドを使用しているものの、本磨き仕上げによりそのコントラストを引き立たせ、総合商社としての構えを重厚に演出している。また、一歩足を踏み入れると同時に燦々と降り注ぐ自然光は、玄関ホールに屋外のような開放感を与える。上層階でエレベーターを降りるとホールから光庭へ導かれ、そこから両側のオフィスをひと目でとらえることができる。

そして、中央の吹き抜けを挟んで一・二五〇平方メートルの無柱オフィスがワンフロアに二つずつ配置されている。

一方、省エネルギーを実現する

施工者より

地元の皆さんの協力のもと進んだ 施工計画



株式会社間組当時工事課長
鈴木捷夫 Katsuo Suzuki

昭和五十三年に着任した当時(四十二歳)は伊藤忠本社ビルの工事部の課長でした。新宿の紀伊国屋や東海道新幹線の熱海駅などの工事に携わった後に担当になったのですが、最初はメンバーが三名ぐらいでスタートしたので、大きな建物を担当することへの未知の部分があり、不安もありました。しかし間組にとって縁の深い青山の地であったこと、建設予定地の一部は間組が所有する土地であったこともあり、やりがいのほう

が強くなり、いつの間にか不安もなくなりました。

オリンピックに合わせて青山通りの拡張が行われ、街の表情が変わりました。以降周辺の建物が高層化して行きました。そんななか商店街や町内会のみなさんが意見をまとめてくださった。高い建物を建設するという割にはスムーズに進みました。本当に地元のみなさんのおかげです。

東宮御所が近くにあったり、銀座線の土盛りが浅かったりと工事を取り巻く環境が複雑ではありましたが、みんなで知恵を絞って解決し、いまだにはいい思い出です。北側に秩父宮ラグビー場があるので、ラグビーの試合が行われている時間帯に工事用の笛を吹くと選手が混乱するので制限されたという、この場所ならではの問題もありました。ラグビーを見るたびに思い出します。

建築主より

脈々と受継がれる 竣工当時の理念



伊藤忠商事株式会社 人事総務部
ファシリティ・マネジメント室長代行
田村拓也 Takuya Tamura

東京本社ビルは、経営環境の厳しかった新社屋計画時に、約四〇〇〇名の従業員が六カ所に分散を余儀なくされていましたが、一カ所に集約することによる社業の一層の飛躍を確信し、英断された戸崎社長の熱い思いと、それに応え注力した関係者の皆様の努力により実現できました。

本建物への先人の思いは、竣工以降の入社である私を含めた社員にも脈々と受け継がれています。日々のメンテナンスや管理運営はもちろん、竣工二十年を超えた頃

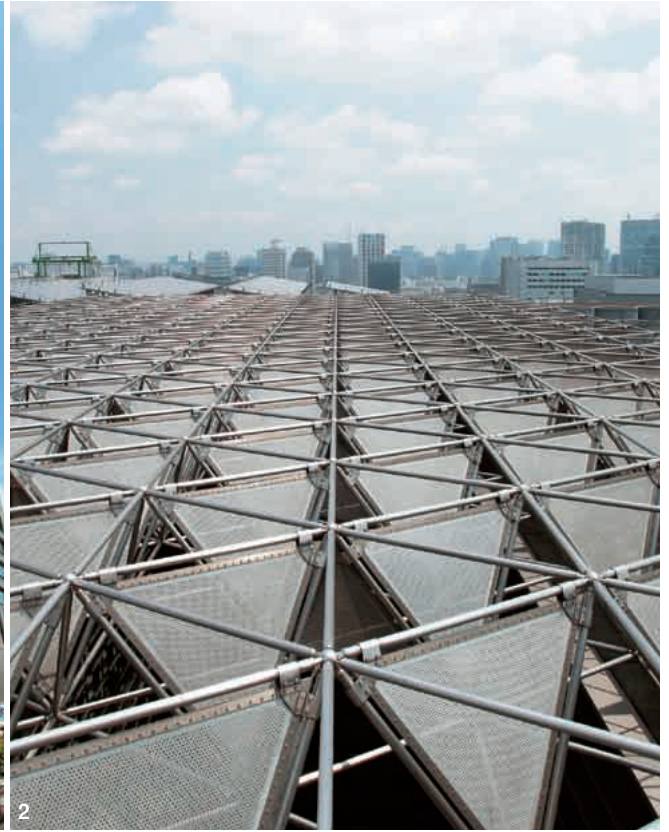
より、大規模改修工事計画を、設計会社・施工会社・管理会社とタスクフォースを組成し、二〇〇四年の空調改修工事を足がかりに、トイレ・エレベーター・受変電設備等の更新工事を計画的に実施しています。

社員やお客様にも見える事務室のリニューアルについては、出来る限り、社員の動きや外部の景色・光が感じられるように、間仕切りはガラスパーティションを多用し、特に、センターコアの吹き抜けエリアをコミュニケーションエリアとして使用するように改修しました。什器につきましても一新し、常にお客様目線、社員目線を念頭に改修にあたっています。

また、二〇〇八年に創業一五〇周年の記念事業の一つとして、外部に設置されていたヘンリー・ムーアの彫刻作品を、竣工当時の通り一階ロビーに戻しました。

新社屋の完成式で戸崎社長が語った「潮の流れを変える意識の改革を」という言葉を、この建物と共に、次の世代に確実に引き継いで行くことが我々の使命と思っています。

伊藤忠商事東京本社ビルの今



1 現在の伊藤忠本社ビル。当時と変わらない外観は定期的に行われるメンテナンスによって保たれている。2 屋上の遮光トラス。光庭の上部に配置され、西日や夏の日差しを軽減し熱負荷を抑えている。また自然換気も行えるので、非常に環境を意識したものになっている。3 現在の廊下。時代によるニーズを踏まえ、変わっていく内部空間。今でも社員の建物に対する想いは変わっていないように感じられた。(写真：風間芳健)